
ナイト&ベイビー 少年ナイトの冒険

城啓裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイト&ベイビー 少年ナイトの冒険

【著者名】

城啓裕

N2272BA

【あらすじ】

今から数百年以上の昔。モンスターは、世界中に当たり前におり、たくさんの賞金稼ぎが腕を競う。そんな時代だった。これは、そんな時代に生きる少年の冒険ファンタジー。

第0話 プロローグ（前書き）

昔、親に買つてもらつたゲームを元に書いた小説です。駄作ですが、
読んでください。

第0話 プロローグ

「黒い翼の悪魔が世界を闇に包む時、白い翼の天使は汚れなき愛と迷いなき勇気で、悲しみと絶望の世界から私たちを救うことでしょう。」ピカードに伝わる言い伝え。

この物語は、君たちのおじいさんのおじいさんのまたおじいさんが生まれるよりもずっと昔の、お月様がまだ2つあった頃のお話。

山奥の田舎の村に住む少年”ナイト”と可愛い妖精の女の子”二二一ナ”、そして怪物の赤ん坊”ベイビー”。

このなんとも頼りない3人がいつの間にか世界を救うことになってしまつという不思議な不思議な冒険が、今始まりうとしています。

第1話 出発—オラガ村からキョキョロ村へ（前書き）

ショッパンからいなんです。冒険ものは、初めてですがよろしく
お願いします。

第1話 出発—オラガ村からキヨキヨロ村へ

ある嵐の日の深夜。一羽のコウノトリが袋を銜えて飛んでいる。どこから来てどこへ行くのか。その袋には何が入っているのか。それは、誰にも分からない。すると、2体の悪魔がコウノトリを襲った。コウノトリが銜えている袋に入っている何かを奪おうというのだろう。当然、コウノトリは抵抗する。悪魔は、必死でコウノトリを押さえつけようとするが、突如落雷が発生。コウノトリと悪魔を直撃した。悪魔は逃げたが、コウノトリは落雷にやられ死んでしまった。袋は、すぐ下にある村の近くに落ちていった……。

その翌日は、快晴だった。まるで、昨日の嵐が嘘のようだ。ここは、オラガ村。野菜産業で有名なこの村が、始まりの村だった。

そして、そのオラガ村に一軒の青い屋根の家がある。この家が、僕の住む家だ。家の中は、どこにでもあるような内装だ。ただ違うところは、中に鳥小屋のような家があることだ。この小屋には、僕と一緒に住んでいる妖精の女の子、”二一一ーナ”が住んでいる。僕は、その隣にあるベッドで夢の中だった。小屋から二一一ーナが出てきた。

「おはよう、起きて。起きてれば。ナイト一起きなさいーーー！」

ナイトというのは、僕の名前だ。お父さんとお母さんが将来、僕が優秀な騎士になれるようにとつけた名前だ。でも、両親は僕が幼い頃、モンスターに襲われて死んでしまった。でも、僕は村人に支えられて、生きている。ともあれ僕は、重い体を起こしひびでから降りた。

「うーん、何？」

「何？じゃないでしょ。村長さんが呼んでたわよ。いい？ちゃんと田を覚ますのよ。村長さんが呼んでるんだから。いいわねー？」

「はーい・・・。」

僕は、服を着て外に出た。家の前に井戸があり、僕はそこで顔を洗い、水を一杯飲む。これが、朝の日課だ。普段の僕は、この後畠の手伝いに行くが、今は村長さんが呼んでいるのでそれどころじゃない。僕は、村長の家に前に立ち、呼び鈴を押した。しばらくすると、村長さんが出てきた。

「おはよう、ナイト。今日はいい天気になつたね。」

「ええ。といひで、用事つて何ですか？」

「ああ、そうだつたな。この手紙を、キヨキヨ口村のキヨゾキヨゾに届けてくれ。」

「手紙・・・ですか。」

「はあ・・・。」

「どうしたんですか？」

「ナイトも知ってるだろ？。今年は、野菜の出来が良くないんだよ。大きくなる前に枯れたり、腐つたりする野菜が多くてな・・・。このオラガだけじゃなくてキヨキヨ口でもいろいろ起こつていて、いなんだ。近頃、どうなつているのか・・・。そういう、念のため

「マリー婆さんからおにぎりをもらひつづけのを貰わんよ。何が起るかわからぬからな。」

マリー婆さんは、僕の母親代わりのおばあさんのことだ。僕の為にいつもご飯を作ってくれる。でも、一一一ーナからは、家にもかまどを作りなさい。といわれている。

「じゃあ、行つてきます。」

「待ちなさい。」

村長が止めた。まだ何があるのかな？

「そのまま村を出ではいかん。ちよつとついてきなさい。」

「はい。」

僕は、村長に言われるままに走ってきた。そこは、村長の自室だつた。

「この宝箱に入つてゐるものを持つていきなさい。」

僕は、宝箱を開けてみた。中には、僕が一番ほしかったものが入っていた。剣と鎧と兜と盾だ。騎士の四大道具といわれ、まさにナイフの如く相応しい道具だ。

「この道具は、わしが若い頃に使つていた道具だ。古いが、使うに支障はないと思うぞ。」

僕は、それを早速装備してみた。うん！ いける！

「じゃあ、行つてきます。」

「気をつけねんだぞ。」

僕は、マリーおばさんと一緒に行つた。

「マリーおばさん、キョキョロに立つてゐるのと、おじいさんをくだされ。」

「キョキョロに行くのかい? セツニヤ昔、アーノの奴も一人で出かけて迷子になつて村中大騒ぎしたつけ。。。泣きながら鼻水たらして帰つてきたんだよ。もつて行きなさい。はー。」

「ありがとうございます。中身は?」

「食べてのお楽しみだよ。」

「じゃあ、行つてきます。」

僕は、村を出てキョキョロ村へ向かつた。

「うわ、しばらく村から出てない間に、モンスターが増えたわね。」

「うん。バッサバッサと倒していくわ。」

歩いていると、モンスターが襲ってきた。僕は、次々とモンスターを倒し、先へ進んでいった。しばらく行くと、分かれ道に差し掛かつた。看板にはこう書かれている。

西 キヨキヨ口村 東 騎士の道

僕は迷わず、西へ向かった。

キヨキヨ口村に到着した。キヨキヨ口村は、魚が取れる港町だがなぜか最近魚が取れなくなっているらしい。村の入り口に知り合いがいた。

「よお、ナイトじゃないか。」

「あ、ズキヨロさん。」

「聞いてくれよ。『二ジサカナが食べたくなった。そつだ、キヨキヨロへ行こ。』ってこうキャンペーンを今度イステンで始めようと思つんだ。じつ思ひ。」

「どうして言われても・・・。」

「そしたらさ、旅商人が『ズキヨちゃん、いいんじやないか！？』って言わたんだ。でもよ、橋が壊れてイステンにいけないんだよ。」

「

「ダメじゃないですか。で、橋はいつ直るか分かってるんですか？」

「うーん、大分先だな。」

「そうですか・・・で、キヨゾキヨゾ爺さんは？」ですか？

「ああ、それなら奥のまつの家だぜ。お前さん、長い」と来てなかつたから忘れてるだろ。」

「ええ、まあ。」

そういえばそうだ。キヨキヨ口村には、久しぶりに来る。少し忘れているような気がしていた。用事を済ませようと思ったが、疲れたので海岸付近で、マリーおばさんからもらったおにぎりを食べることにした。中身は沢庵だった。さて、用事を済ませよう。

第2話 謎の生物との出会い

少し休憩した僕は、キョゾキョゾさんの家に向かった。キョゾキヨ
ゾさんはこのキョキヨロ村の村長なんだ。キョゾキヨゾさんの家に
到着した。

「ハニコン

「誰じや?」

「オラガ村のナイトです。」

キョゾキョゾさんが出てきた。僕は、彼に手紙を渡す。

「何じや? 手紙か? ふむふむ。うーむ、なるほど。。。そつかそ
うか。。。ナイト、お前れどこの村長? 「そんなに心配しなく
ていい。」と伝えてくれ。一ジサカナもじがりくすれば帰つてくる
じゃう。前のどこの村長はまるで、世界の終わりみたいに落
ち込んでこむの。」

「ええ。野菜もまったく収穫できずに困つてゐみたいなんですね。」

「奴は昔から心配性なんじや。若い頃はいつも前向あじやつたん
だが、年かのう。ナイト、村長を励ましてやつしてくれ。」

「はい。」

そして、僕はキョゾキョゾさんの家を後にした。

「ナイト、お使いも終わつたし村に帰つましょ。」

「うふ。ちょっと海のまつに行つてみたいな。」

「最近どうなつてゐるか気になるから?」

「うふ。」

海辺に来たが余り活氣がないようだ。やつぱり、獲れないのかな・。
・。

「あ、漁師さん。どういつた感じですか?」

「ああ、ナイトか。ぜんぜんダメなんだよ。網が壊れるくらいに大量がいいねえ。」

「そうですか・・・。」

中には釣りをしている人もいた。バケツを覗いてみたが、魚は少ししかいなかつた。僕は、オラガ村へ帰ることにした。その途中、一人の漁師がつぶやいていた。

「ズキヨロの奴、調子のいい商人に言われて何が「二ジサカナが食べたくなつた。そうだ、キヨキヨロに行こう。」だ。二ジサカナの毛皮細工だつてあるだろうに。」

多分この人は、二ジサカナの毛皮の細工職人で皮をはげないから、苛ついているのだろう。二ジサカナの毛皮服もこの町の名産品だ。

モンスターを避けながら僕は村の入り口の橋に到着した。橋の前に何かがいた。

「何だらう？君、大丈夫？」

ピクリと動いた。返事はないが、生きているようだ。どこから来たんだろう。すると、回りが暗くなり一点に光がさした。光の中から謎の生き物が現れた。その生き物は体が半分透けている。いわば半透明状態だ。

「少年よ。」

え、僕？いや、僕しかいないだろう。僕はそいつに向かい合った。

「運命に見初められし者よ。お前に託す。無垢にして幼きこの子を託す。母の元に届けよ。神の塔に眠る母の元に届けよ。大いなる悪意の目覚める前に。頼んだぞ・・・。」

そういうと、そいつは消えてしまった。気がつくと周りは明るくなつており、そこはいつも風景だった。

「何？今の。なんなの？」

僕も分からぬ。とりあえず帰ろう。だが・・・。

「ちよっと、ついて来ちゃうわよこの子。村長さんと相談しましょう。」

「うん・・・。」

僕は、村長の家に向かった。村長にさつきあつたことを全部話した。

「どうわけなんです。村長、なんだつたんでしょう？あれ。」

「それはな・・・。」

僕と二二一ーナはつばを飲み村長の決断を待った。

「幻じやうひ。お前も二二一ーナもクルクルの種の毒にあてられたんじやうひ。」

「「そんな・・・。」

「第一、こんなへんすべりんな生き物が神様の子供とは到底思えんて。それよりも、このへんちくりんな生き物を処分してきなさい。どんな災ごの種になるやもしれん。あの時のよつな・・・。」

あの時とこうのは、僕もよく覚えていない。ただ、このあたりに災いをもたらしたのは確かだ。

「やうひじや、明日にでも騎士の道の先にある洞窟に逃がしてきなさい。」

村長の言葉はとても残酷だった。第一、あそここの洞窟に入つて帰つてきたものはほとんどない。洞窟の中には、伝説の魔物が住んでいるのだ。それが何なのかは分からぬ。僕は、その子をかわいそうに思いながらも家へ帰つた。

第3話 捨てるへ捨てない？（前書き）

ひねりのないタイトルですみません。

第3話 捨てる・捨てない？

翌朝もいい天気だった。ベッドの横にある小屋から一一一ナが出
てきた。

「おはよー、ナイト。」

「おはよー。」

「あの子は？」

「まだ寝てる。」

ベッドの横を見ると、なるほど。ピンクのモンスターが眠っていた。

「とつあえず、朝一はんを食べよう。」

僕は、袋からおにぎりを取り出して食べた。中身は空っぽだった。
つまり、何も入っていない。一一一ナの分は、少し端を取ったの
を『『えてこる。

「ブウ?」

あの子がおきたようだ。

「どうして? 一一一ナ。」

「残念だけど、この子は捨てるしかないわね・・・。」

僕は、その子にもおにぎりを『貰える』と出発した。

分かれ道に差し掛かった。僕は東の道に行つた。騎士の道は石畳の道だ。なぜ石畳なのかは僕も知らない。先へ進むと何かの墓石があった。

「かすれて読みにくいわね。名も知れぬ勇者、ここに眠る。猛き魂、安息の地に住もう。何か難しいのよね。っていうか、ここ行き止まりよね。」

「あ。途中で分かれ道があつたんだ。」

僕は、引き返し分かれ道のほうに行つた。そこには、恐竜に似たモンスター、ディノがいた。

「うわあー。」

僕は、一瞬ひるんだが村長さんからもうつた剣で何とかディノを撃退した。そして、洞窟の前に来た。二二二一ナが言った。

「さ、お別れよおチビちゃん。気を・・・つけてね・・・。かわいそうな気もするけど・・・。」

だが、その子は行きたくないらしくこっちを振り返つた。

「振り返っちゃダメだ！」

僕は心を鬼にして、洞窟から離れた。そして、騎士の道に戻つてき
た。

「あの子・・・、大丈夫かな？」

「とりあえず、今日は休みましょ。」

「うん・・・。」

僕達は、村に帰ってきた。全員、「ナイト、どうしたんだろう。」と言わんばかりの顔をしていた。僕は、家に入り眠りについた。もちろん、沈んだ顔で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2272ba/>

ナイト&ベイビー 少年ナイトの冒険

2012年1月14日21時50分発行